

家庭の教育力の低下と親の意識の変移について

古市 久子 (大阪教育大学)
加藤 美恵 (橿原市金橋幼稚園)

要 約

本研究では、家庭教育について、幼稚園児をもつ親206名から得たデータをもとに、アンケート調査を実施した結果を報告している。「親の意識の変化」に焦点を当てて、家庭で重要と思われることと、実際に実行している程度の差を調べることで家庭の教育力の低下を考えた。その結果①【子どもの反社会的行動への規制】【対人的なやりとり】【親子の触れ合いに関するもの】については教育する力が強く、【大人の時間的余裕を必要とするもの】【子どもの行動を規制するもの】に関しては教育する力が低いことがわかった。

本調査において、近年の親は自分の養育者から受けた育児をそのまま実践しているのではなく、影響を受けながらも自分流の子育てをしている、ということがわかった。そして、その内容については「好きな所・良かったと思う所」を取り入れている割合は非常に高く、「嫌いな所」を自然と行っている割合は意見を二分した。これらを教育する力の低下の是非を問う判断材料とする時、少なくとも親の意識は「低下していない」という認識を持っていると考えられるであろう。やはり、家庭の教育力の低下の原点は「力不足」ではなく「意識の変化」にあると言える。

キーワード：家庭の教育力、親の意識、幼稚園児の親へのアンケート

はじめに

近年、「子どもが変わった」とよく聞かれるようになった。実際に、学校や幼稚園の教師の多くが子ども達の変化を感じている(2000北海道新聞)。その変化とは、「我慢強さ」「基本的生活習慣の未定着」「自己中心性」等については「低下した」と感じており、逆に「自分の意見を言う」「計算力」等については「良くなった」と感じているというものである(1999ベネッセ教育研究所)。「低下した」項目については子どもが体的に学び取っていくものが多く、「子どもが変わった」とは決して肯定的な意見ではなく、この変化を問題としてとらえているということがいえるだろう。

近年、社会問題になっている幼児、児童の変化と言えば「学級崩壊」「生活の夜型」「発達異常」「ADHD」「体力低下」等がある。幼稚園教育要領改訂にともなった放任保育ゆえの「学級崩壊」(尾木)や、メディアやテレビゲームの普及ゆえの「体力低下」(2003黒川)などその変化に関して様々な要因が取りざたされている。しかし、筆者は子どもの生活の主体は家庭であり、根本の「家庭教育」に焦点をあてられるべきではないだろうかと思う。なぜなら、幼稚園による放任保育やメディアの普及が子どもの変化を引き起こす大きな要因だったとしても、子ども全員が一樣に同じ変化を起こしてはいないからである。子どもが変化を起こすか否かは、子どもが各々で過ごす家庭生活が大きく影響していると考えられるのである。

そこで、近年の家庭教育に関して次のようなデータがある。子どもの変化に合わせて「親の変化」も問題視されているというものである。「子どものわがままと受け入れてやるべきことの区別がついていない」「基本的生活習慣を身につけさせる配慮が弱い」「しっかり遊ばせていない」等の項目について親の変化を感じる、と多数の保育士という(1998臨床教育研究所「虹」)。また、「夜型」の生活を送っている子どもも増加しており、大人の生活に子どもを合わせさせているという現状もある。社会のみる“子どもの変化”とは、家庭教育の揺るぎを示唆していると言っても過言ではないだろう。それを反映するかのよう、「家庭の教育力は低下した」と子どもをもつ人の7割近くが肯定している(2001国立教育政策研究所)。

しかし、一方で家庭の教育力の低下は一部のものであり、全体としてはしつこくは都市部を中心に過熱しているという説もある(1999広田)。現代を「地域共同体が消失し、学校が不信の目にさらされる中で家庭の責任がより強まっている」と位置づけている。そして、少子化により親たちは、子どもの教育やしつけに、より熱心になってきているとしている。教育力の低下がいわれる要因は階層差や地域差にあるとし、「家庭の教育力が低下した」のではなく、「子どもの教育に関する最終的な責任を家族という単位が一身に引き受けるをえなくなってきた」という広田の意見もある。

家庭の教育力の低下については、国立政策研究所の

調査「家庭の教育力再生に関する調査報告書」に代表されるように、国の政策としても重要視されている。当研究では、この問題について、時代とともに変化する「親の子育てに関する考え方の変移」が一要因ではないかと考え調査を進めていく。なぜならば、子どもの変化は多数の要因が重なり合って起こるという捉え方ができるが、その要因を親の意識一つでコントロールしうるからである。筆者はそこに問題点を感じ、子育てに関して、重要と考える程度と実行している程度の差から伺えることを中心に「家庭の教育力の低下」の詳細を探っていきたいと考える。

また、家庭の教育力の低下については、親の学歴により二極化しているという説もあるが、本研究では社会全体の考え方の変移について考察していくため、親の学歴からの視点では分類しないこととする。

1 先行研究

第1節 子どもの変化の現状について

「家庭の教育力が低下している」と、子どもを持つ7割近くの人が感じているという世論調査がある(2002 国立教育政策研究所)。しかし、このように言われる根本にあるものとは一体何なのであろうか。近年は、青少年による凶悪事件が増加し、その度に家庭のしつけに問題を返される時代である。このような側面から考えても、家庭の教育力の低下の根本にあるものとは、「変化した子どもの姿」と言う事ができるだろう。現代の子どもの変化には「学級崩壊」「生活の夜型」「発達異常」「ADHD」「体力低下」等がある。

「学級崩壊」の現状としては、「小一プロブレム」と呼ばれる小学校の集団生活に順応しきれていない子どもの存在や、小学校高学年を中心とした「授業妨害」等がある。子どもの変化は1996、1997年頃から教育関係者の間で激変したと言われるようになったが(1999 尾木)、その変化は1990年の幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂と一致していると考えられている。自由と放任を混同してしまった園も少なくなく、はじめと個性の両立に温度差が生じてしまったことが主要因という見方がある(1999西日本新聞)。

「生活の夜型」は、最近、最も顕著に表れている子どもの生活の変化である。1995年度と2000年度の調査の比較では、就寝時間に関して、幼稚園児はほとんど変化がなかったが、保育園児は全体的に遅くなることがわかった(2000ベネッセ教育研究所)。特に9時頃の就寝が減少し、9時半頃や10時頃の就寝が増加した。しかし、この子どもの変化は、子どもが変わったのではなく親が子どもを変えたということができないのではないだろうか。親の生活に子どもの生活を合わせてしまっている現状をうかがうことができる。ま

た、このことから、「親の変化」が存在するといえるだろう。

「発達異常」については、主に保育者の視点からみて「手のかかる子ども」が増加したということである。ときどき衝動的な行動を起こしたり、じっとしてられない子どもが増加している。このことを小関は「確かに子ども達に異常が起こっており、2つの要因がある」という。1つ目は、子どもの発達の基礎は3歳までに脳が受ける刺激にあり、現代社会には子ども達の脳に悪影響を及ぼす刺激が数多くある、というものである。そして、2つ目は、よく行動を観察すると、脳に微細な障害があると思われる子どもの着実な増加がみられるというものである。これらの原因やメカニズムは明らかとなっていないが、複数の医療関係者からこのような指摘がある(1999西日本新聞)。

「ADHD」は注意欠陥、多動性障害という脳内の神経伝達物質の異常からくる神経疾患の一種とされている。1学級に1人という割合で発症し、落ち着きがなかったり、集中力が無いといった共通性がみられる。日本の管理教育の中では問題児とされがちであるが、「障害」ではなく「個性」ととらえるべきだという考え方が広まっている(司馬)。

「体力低下」について、1980年代をピークに子ども達の体力が低下しているというデータがある(文部科学省)。これに関し、松浦は体力低下の理由に、食生活の変化と疲れを回復することと発達に必要な休息の減少をあげている。そして、外遊びの減少により運動の機会が失われたことも大きく影響していると考えられている。体力がないと集中力が持続しないということもあり、教育現場では様々な日常生活との関連を重視し、体力低下を問題視している。

第2節 広田の研究について

第1節において子どもの変化を述べたが、この変化の要因を家庭教育に求める社会の動きに警鐘を鳴らしたのが広田照幸(1999)である。広田は、近年は家庭の教育力が低下したと言われるが、そもそも昔は教育力が高かったのか、という疑問から出発している。

この結果、昔は村ではしつけや人間形成の機会が地域や親族のネットワークに拡散的に埋め込まれ、都市でも家族という単位が流動的であり経済的・時間的余裕の少ない多くの親は子どもをなおざりにしがちであった。言い換えると、昔は農村でも都市でも、多くの親たちはしつけや家庭教育に必ずしも十分な注意を払っていなかった、ということである。

しかし、このような社会の在り方は、大正・昭和の新中間層の教育関心をえて、高度経済成長期に家族関係や生活意識が変化したことを受けて大きく変容して

いった。生産から消費へと移行した家族が長期的な視点に立って「よりよい生活」をしていくには、子どもの教育がかつてないほど大きな意味をもつようになった。そうした流れの中で、子どものしつけや教育の責任者が家庭に一任されていくようになったのではないか。

つまり、時代が進むにつれて子どもへの責任が、地域・学校・家庭から家庭のみになり、家庭の教育力は低下したというよりもむしろ教育に対する意識はますます強まっている、と結論づけられている。子どものしつけへの不満は、親の学歴等の階層差などから生じる価値観の多様性が存在し、全体ではなく一部の親へのものである、としている。

第3節 清川の研究について

第2節では広田の「子どもの教育の責任が家庭へ移行したことで、教育する家族が社会全体に広まった」という説を取り上げた。しかし、地域共同体の教育が崩壊したことで教育の責任が家庭にゆき、母子密着型の子育てを行うようになった親たちは、現代子育ての落とし穴にはまっていると提唱したのが清川である。本論文には、現代社会の子育てに多くの示唆を与える清川の研究と共通する所があるため、一度清川の研究をみてみたいと思う。

清川は問題行動発生メカニズムを次のように説明している。第一段階の一つ目は「抑制型」の子どもの誕生である。1960年代以降日本の家庭は消費の単位となり、その家庭の本質の変質と時を同じくして、「育児・教育の共同性」の喪失が進行し、その結果子育ては必然的に「私化」されていった。「子育てをしっかりと」「家庭教育が大事」というプレッシャーの中で、親たちは子どもを管理して子どもの行動を抑制するのが「抑制型」の子どもの誕生である。抑制型の子どもは母親の快と感じる行動を自然と行うようになることから、自主性や創造性が生まれにくいとしている。二つ目は、あらゆるモノを子どもが望む前に与えられることで「耐性」が育っていない子どもが増加した、というものである。子どもの数が少なく消費の単位となっている現代の家庭では一方的にモノが与えられ、幼児期に必要な忍耐力が培われないとしている。三つ目は、地域社会における子育ての共同性が喪失し、子どもの発達の遅れや歪みを修正してくれる地域社会の「子育て修正機能」は完全に喪失してしまったということである。

第二段階は、学童期に起こるテレビ等の「メディア漬け育児」の広がりや、発達の遅れや歪みを増幅しているということである。こうした育児を受けた子ども達は、メディアへの長時間接触によって前頭葉を発達させる外遊びや集団遊びの時間が激減している。自己

制御や未来を構想する「人間らしい」心をつかさどる前頭葉の発達も危うくなっているという。

そして、第三段階は、小学校高学年から中学、高校にかけて様々な問題や壁にぶつかった時に、内面のブレーキがかからない状態になることである。自主性や主体性が十分に身につけていない上に、耐性が育まれていない子ども達は「逃げる」ことを選択する。逃げる場所は「親思いで優しい」子ほど、「子ども部屋」を選び、思春期を迎える頃、親と子の立場が逆転して手がつけられなくなる。また、そこまではいなくても、同じメカニズムで「キレやすい」子どもも発生する。つまり、現代の日本社会では普通の子育てのなかにそうした子どもを生み出す土壌があり、一見普通に見える子どもでも内面はノーブレーキ状態といった子どもが、現代子育ての歪みを象徴する現象といえるのである。

第4節 当論文の展望について

第1節で子ども達の変化の実態を挙げたが、「学級崩壊」や「体力低下」は第3節の清川の問題行動発生メカニズムの過程において一部を説明することができる。また、「発達異常」や「ADHD」については、原因が脳の障害や神経疾患などとされているため今後の見解も医療的視点からなされるべきである。よって、本研究では「生活の夜型」や「体力低下」など、家庭が強く影響しうると考えられる子どもの変化を中心として研究を進めていく。

また、第一節の広田の研究を広げて、「教育する家族」の社会全体への広がりの中にも段階があると考えていく。家庭教育の重要性が広まり始めた高度経済成長期以降の家庭と、その時期に子どもであった近年の親が持つ家庭では子どもの教育に対する考え方が異なると思い、その二段階に区分する。そして、当研究では、二段階目つまり近年の親に焦点を当てて考えていく。なぜなら、「家庭教育を重要視した時代に育った現代の親は、養育者の子育てを客観的にとらえ自分なりの価値観を形成しているだろう、と考えたからである。なお、二段階目の始まりである1995年前後は、「子どもが変化した」という声教育現場で増加した時期と一致している。

2 問題・目的及び仮説

第1節 問題・目的

近年、「家庭の教育力は低下した」というのが社会一般の見解であるが(2001国立教育政策研究所)、それらは子どもの変化から認識されていることだろう。青少年の凶悪犯罪が起こる度に家庭教育のあり方が問題にされ、学級崩壊に関しても学校で起きている問題

にもかかわらず家庭教育のあり方の問題として取り上げられる傾向にある。

第1章の先行研究において「地域共同体の崩壊により、家庭が教育の責任を一身に受けざるを得なくなった」(1999広田)「家庭における母子密着型の子育ては、子どもを抑圧している」ということを述べた。「教育が家庭の責任である」というプレッシャーから、親は子どもに対して厳しく接しているのが近年の子育ての現状なのであろうか。親に真に甘えられない子どもが増加し、情緒が安定しないことから「荒れる・キレる子ども」「自己チュー児」が増加しているという説もある(2003鈴木)。つまり、「教育力の低下」と言われている一因には、家庭に責任が強く押し掛かったゆえの悪循環の結果とも捉えることができるだろう。

しかし、一方で、教育力低下の社会的な見解は「親の過保護や甘やかし」や「放任」など「家庭の教育する力そのものが低下した」というものなのである(2002国立教育政策研究所)。この二つの矛盾は、広田は「親の学歴や階層差によるもの」であり、「教育する力の低下」は一部のものとしている。しかし、筆者はそれだけではないと考えている。なぜならば、「教育する家族」が誕生したのは高度経済成長を経た1970年代以降であり、近年の家族は「教育する家族」の第二期目に当たるからである。学歴中心の社会の加熱が少し冷め、「ゆとり」を求め始めた時代の流れに沿うように、親の意識も変化して当然であろう。自分が受けた強い「教育的な子育て」を全面的に肯定するのではなく、自分の受けた子育ての経験と自らの価値観を持って「自分の育児」を行っているのが近年の親であろうと思うのである。

「家庭の教育力」の低下の背景には、様々な要因が組み合わさっているであろうと考えられる。過去の研究には、地域共同体の崩壊等の社会のあり方の変化や家庭に教育の責任が一任されるようになったゆえの歪みなど様々な視点から研究が進められている。しかし、親の意識との関連に注目して、家庭の教育力の低下を検証した研究はみられない。よって、当研究では、近年の親が子育てにおいて何を大切にしているかを明らかにすると共に、重要と考える程度と実行している程度の差から、どの項目において「教育する力の低下」があるのか明らかにすることを目的とする。

第2節 仮説

1) 家庭の教育力の低下の実態について

1996、7年頃から子どもの変化を顕著に感じるようになったという学校関係者の報告がある。尾木によれば、幼稚園教育要領・保育所保育指針改訂の時期と一致するという。しかし、全ての子どもが同じように変

化を起こしてはいない。つまり、1996、7年の変化の増加に一致するものとして、「教育する家族」の2世代目の誕生に注目すべきであろう。つまり、教育する家族の二世代目である近年の親は、重要と考えるものなど、子育てにおいて自分なりの「価値観」をもっているのではないかと考えた。

1. 予備調査等においても、近年の保護者は挨拶や思いやりなど「対人的」な面を重要と考えていることが伺える。

このことから、近年の親は、社会的な項目に関して重要と考え、それを子どもに定着させる為の子育てを実行している、と推測できる。

2. 清川(2003)の報告にもあるように、近年メディア視聴の悪影響による異変を起こす子どもが増加している。また、子どもの体力の低下も懸念されており、家庭の教育力の低下を疑問視する要因の一つとなっている。

このことから、家庭の中で親子間のやりとりが中心と思われる項目に関しては、重要と考える程度もそれを実行している程度も低い、と推測される。

3. ベネッセの子どもの生活調査にもあるように、近年おけいこ事や学習塾等に通う幼児が6割を超えている。

このことから、近年の親は、子どもの教育に関して早期から学ばせる事が必要と考え、またそれを実行していると考えられる。

2) 養育者の子育てとの関連について

社会は近年の親の子育てと昔の子育てを比較して、教育する力が低下したという捉え方をしている。昔自分が受けていた子育てを実行できていなければ「低下した」ということができるだろう。

このことから、「自分が受けた養育をどの程度実行しているのか」等、養育者から受けた子育てとの関連を明らかにしていきたい。

3 調査方法について

第1節 予備調査について

1. 目的

本調査に用いる質問項目を決定する際、近年の「子どもの様子」や「家庭のあり方」について、日々子どもと直接接している教師の問題意識を反映させるためである。「家庭」を第三者的な立場から捉えることのできる者として教師を選択した。

2. 調査期間

平成15年6月～7月

3. 調査対象

柏原市内5園と香芝市1園の幼稚園教諭

4. 回収状況

40名の回答を回収（回収率89%）

5. 手続き

近年の保護者や子どもの傾向等について、自由記述で回答を求める。

8. 調査内容・結果

問1)「近年に見られる保護者の方の傾向」については、過保護な親と放任主義の親が目立つという意見が多くみられた。又、家庭でのしつけを園に頼る親や、親自身が模範的な行動を示していない（言葉が乱暴・園のきまりが守れない等）、という回答が得られた。

問2)「保護者の希望や不満など」については、行事の際のマナーや提出物の提出の悪さが指摘されていた。子育てに関しては、言葉だけでなく行動で模範を示すことと、わがままとやんちゃの区別や物事のけじめをつけることを求めている。

問3)「近年にみられる子どもの傾向」については、体力・忍耐力・意欲・継続力・友達と関わる力等について低下を感じる。又、自分の言いたいことを最後まで言い通す力が強く、嫌なことを聞き流す、家庭では違うのに園にくるとわがままになる等過去にはあまり見られない傾向もみられた。

問4)「近年、保護者が子育てにおいて大切にしていること」については、知識（習い事含む）・人との関わり・優しさや思いやり・挨拶という回答が多くみられた。また、周りへの順応性や他の子どもと同じであることを大切にしている、という意見も得られた。

第2節 本調査について

1. 調査目的

家庭の教育力の低下について幼稚園児の保護者に“重要と考える程度”と“実行している程度”の差を調べることで、現代の保護者は子育てにおいて何を大切にしているかを探るとともに、教育力低下の詳細を明らかにするため

2. 調査時期

平成15年10・11月配布、それぞれ配布後1～2週間で回収

3. 調査対象

大阪市立I幼稚園と柏原市立K幼稚園、及び香芝市にあるH幼稚園の幼稚園児をもつ保護者

4. 回収状況

296名配布で206名回収（回収率70%）

5. 調査方法

各園を通して配布・回収

6. 手続き

予備調査で得られた現在の家庭教育の問題意識、及び、国立教育政策研究所の『家庭の教育力再生に関する調査研究』を元にした39の質問項目に対し4段階で“重要と考える程度”“実行している程度”それぞれに回答を求める。又、回答者の親の子育てと関連させて12の質問項目に対し4段階で回答を求める。最後に、回答者の親の子育てと自身の子どもへの願いについての自由記述。

7. 調査内容

①子どもとの接触態度25項目 ②子どもの生活の様子14項目 ③回答者自身の子育てに関する考え方 ④養育者から受けた子育てと自分の子育てとの関係に関連した12項目のそれぞれについて4段階で回答を得た。

第4章 結果

本調査について

1. 調査対象者（以下、保護者）の属性（N=206）

(1) 保護者の園児との関係

回答者の97%（194人）が母親であった。保護者の年齢図1に示されているように、回答者の78%（160人）が30代であり、続いて40代、20代が十数名であった。保護者は子ども3～6歳児の親が大多数であった。園児の性別男児56%とやや男児が多かった。住んでいる地域は大阪市・柏原市・香芝市がほぼ同じ割合であった。

2. 保護者と園児との関わりや園児の生活の様子について

ここでは、“重要と考える程度”と“実行している程度”の関係を①平均値②グラフの頻度の2つの視点から結果をあらわす。①の考え方は重要と考える程度と実行している程度、つまり理想をどの程度またはどの項目において実現しているかを計るものであり、②の考え方は重要と考える程度や実行している程度の考え方の分布をみるためのものである。

① 平均値の視点から

平均値を用いて、a：差が大きいもの（差0.5以上）
b：差が小さいもの（差0.2以上0.5未満）
c：差がほとんどないもの（差0.2未満）
d：実行している程度が重要と考える程度を上回るもの、の4つの項目に分類する。

なお、対応のある平均値の検定を行った結果、38項目中34項目において有意な差がみられたため4つの項目に分類することとした。差がみられなかった4項目は「おけいこや学習塾に通わせる」「わがままをきいてやる」「就学前に簡単な数字や文字を家庭で教える」「大人のいいつけは守るよう伝える」であった。

表1 保護者と園児とのかかわりや、園児の生活の様子について

(平均値の視点から)

平 均 値							
	重 要	実 行	差		重 要	実 行	差
スキン	3.89	3.53	0.36	時 間	3.85	3.42	0.43
話 聞 く	3.96	3.3	0.66	習 慣	3.73	3.36	0.35
話 する	3.15	2.82	0.33	運 動	3.81	3.09	0.72
遊 ぶ	3.76	2.82	0.94	栄 養	3.93	3.31	0.62
友 達	2.55	2.46	0.09	好 き 嫌 い	3.73	3.24	0.49
見 本	3.71	2.94	0.77	姿 勢	3.63	3.15	0.48
叱 る	3.99	3.93	0.05	清 潔	3.85	3.66	0.18
言葉遣い	3.84	3.71	0.13	家庭挨拶	3.87	3.65	0.22
理由言う	3.96	3.62	0.34	感 謝	3.97	3.83	0.14
手 伝 い	3.67	3.09	0.58	道で挨拶	3.93	3.65	0.28
大 切	3.93	3.56	0.37	視聴時間	3.53	2.67	0.86
尊 重	3.47	3.1	0.38	番組内容	3.33	2.84	0.49
指 示	2.74	2.52	0.16	文 字	3.23	3.22	0.01
いいつけ	3.67	3.55	0.12	おけいこ	2.68	2.75	-0.07
わがまま	2.44	2.48	-0.04				
我 慢	3.81	3.5	0.31				
ゆっくり	3.71	3.03	0.69				
自分する	3.81	3.29	0.52				
自己決定	3.39	3	0.40				
違 い	2.87	2.55	0.32				
経 験	3.75	3.27	0.47				
交 流	2.89	2.57	0.32				
親 子	3.81	3.41	0.40				
個 性	3.71	3.13	0.57				
おしゃれ	2.36	2.6	-0.24				

a : 差が大きいものは以下の10項目である。親が子どもと向き合う時間を多く必要とするものや、子どもの行動に関してのものが多いいえる。

- ・じっくり向き合って遊ぶ (差0.94)
- ・テレビを視聴する際は、視聴時間をきめて見せる (差0.86)
- ・子どもの見本となるような言動をとる (差0.77)
- ・よく歩かせたり、外で遊ばせる (差0.72)
- ・行動をゆっくり見守る (差0.69)
- ・話をゆっくり聞く (差0.66)
- ・栄養バランスのとれた食事をとらせる (差0.62)
- ・手伝いをよくさせる (差0.58)
- ・個性を大事にした子育てをする (差0.57)
- ・自分のことは自分でさせる (差0.52)

b : 差が小さいものは以下の18項目である。子どもの生活する態度に関するものや親子の触れ合いに関するもの、対人的なものが多いといえる。

- ・テレビを視聴の際は、番組内容を選んでみせる (差0.49)
- ・食べ物の好き嫌いをなくすよう注意する (差0.49)
- ・本やテレビを見るときは、姿勢を正させる (差0.48)
- ・家庭の外へ連れ出し、たくさんを経験をさせる (差0.47)
- ・子どもの生活時間を決める (差0.43)
- ・親子で過ごす時間を大切にする (差0.40)
- ・自分のことは自分で決めさせる (差0.40)
- ・したいと思ったことを尊重して、それをさせる (差0.38)
- ・物を大切にするよう伝える (差0.37)

- ・スキンシップを大事にする (差0.36)
- ・基本的生活習慣をこまめに教える (差0.35)
- ・叱るときには理由を伝える (差0.34)
- ・子どもに自分の話をする (差0.33)
- ・たくさんの大人と交流する機会をつくる (差0.32)
- ・家庭と幼稚園の違いを意識して子育てをする (差0.32)
- ・時にはがまんをさせる (差0.31)
- ・親しい人に会った時は挨拶をさせる (差0.28)
- ・家庭内での挨拶をきちんとさせる (差0.22)

- c : 差がほとんどないものは以下の7項目である。子どもの反社会的行動に関するものが多いといえる。
- ・指示したことをしなくても、特に気にとめない (差0.16)
 - ・感謝や謝罪の気持ちを言うようにさせる (差0.14)
 - ・乱れた言葉遣いは注意する (差0.13)
 - ・大人のいいつけは守るよう伝える (差0.12)
 - ・子どもと友達のように接する (差0.09)
 - ・悪いことをしたときにはきちんと叱る (差0.05)
 - ・就学前に簡単な数字や文字を家庭で教える (差0.01)

- d : 実行している程度が重要と考える程度を上回るものは以下の3項目である。近年の子育ての傾向として、よくみられるものばかりであった。
- ・わがまをきいてやる (差-0.04)
 - ・おけいこや学習塾に通わせる (差-0.07)
 - ・子どもをおしゃれにする (差-0.24)

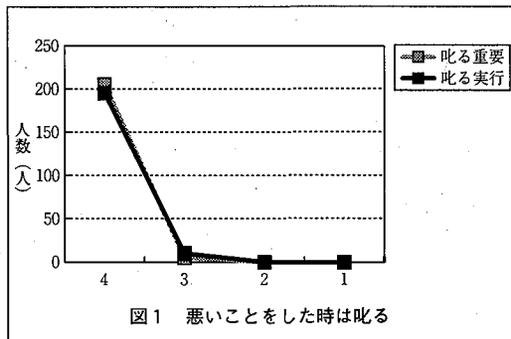
② グラフの頻度の視点から

同じ質問項目に対しての“重要と考える程度”と“実行している程度”を並べて折れ線グラフにし、そのグラフの傾きから1) グラフの傾きがほぼ一致するもの 2) グラフの傾きが一致しないもの 3) 重要と実行が逆転しているもの、の大きく3つに分類する。

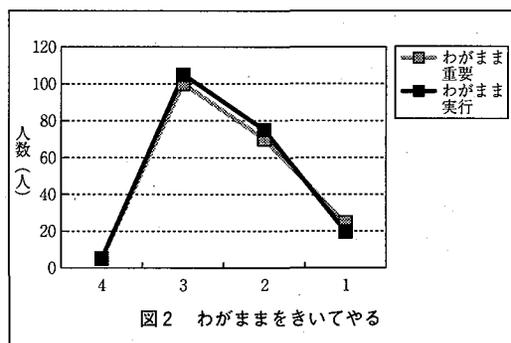
また、中でも度数の分布する傾向が似ているものを集めて細かく分類していく。

1) グラフの傾きがほぼ一致するもの

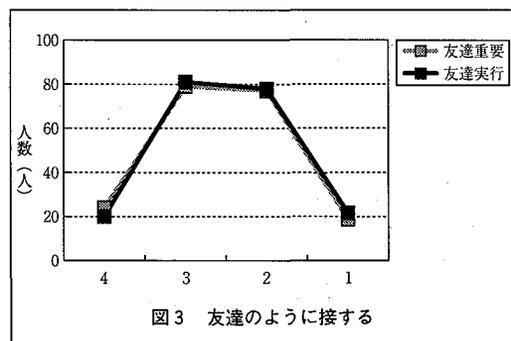
- a : 重要は「重要」実行は「実行」が高いものは以下の7項目であった。子どもの反社会的行動に関してのもの、対人的なものが多いといえる。
- ・悪いことをしたときには叱る (図1)
 - ・大人のいいつけは守るよう伝える
 - ・乱れた言葉遣いは注意する
 - ・感謝や謝罪の気持ちを言うようにさせる
 - ・清潔を保つようにさせる
 - ・家庭内での挨拶をきちんとさせる
 - ・親しい人に会った時は挨拶させる



- b : 重要は「やや重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いものは以下の2項目であった。子育てにおいての『ゆとり』と考えられるものであった。
- ・子どもに自分の話をする
 - ・わがまをきいてやる (図2)



- c : 重要は「やや重要・あまり重要でない」「ときどき実行・あまり実行せず」の割合が高いものは以下の4項目であった。「実行・実行せず」と意見が2通りに分かれたことから、親の考え方にも多様性がある項目といえる。
- ・友達のように接する (図3)
 - ・指示したことをしなくても、特に気にとめない
 - ・たくさんの大人と交流する機会をつくる
 - ・家庭と幼稚園の違いを意識して子育てをする

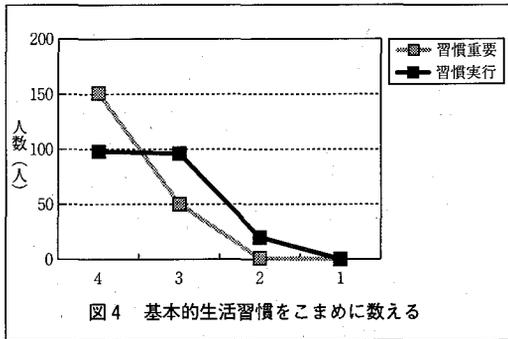


2) グラフの傾きがあまり一致しないもの

- d : 重要は「重要」実行は「実行・時々実行」の割合

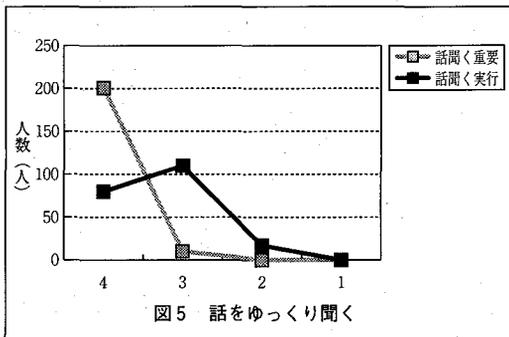
が高いものは、以下の8項目であった。親の言葉による注意に関するものや親子の触れ合い、子どもの生活に関するものが多いといえる。

- ・時には我慢をさせる
- ・叱るときには理由を伝える
- ・基本的生活習慣をこまめに教える (図4)
- ・スキンシップを大事にする
- ・物を大切にしよう伝える
- ・親子で過ごす時間を大切にしている
- ・子どもの生活時間を決めている
- ・好き嫌いをなくすよう注意する



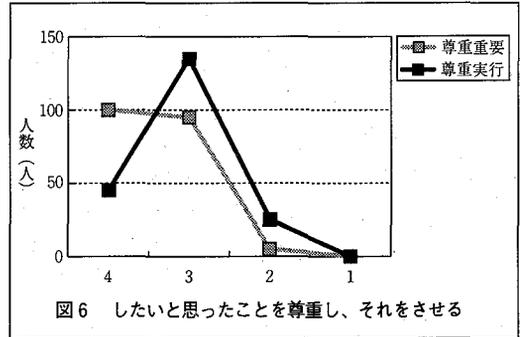
e: 重要は「重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いものは以下の11項目であった。大人の時間的余裕を必要とするもの、子どもの行動を指示するものが多いといえる。

- ・家庭の外へ連れ出し、たくさんの経験をさせる
- ・本やテレビを見るときは、姿勢を正させる
- ・自分のことは自分でさせる
- ・個性を大事にした子育てをする
- ・手伝いをよくさせる
- ・栄養バランスのとれた食事をとらせる
- ・話をゆっくり聞く (図5)
- ・行動をゆっくり見守る
- ・よく歩かせたり、外で遊ばせる
- ・子どもの見本となるような言動をとる
- ・じっくり向き合って遊ぶ



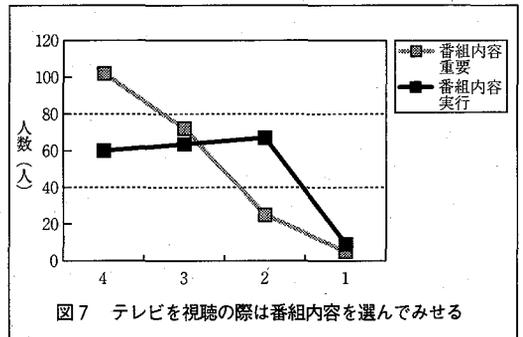
f: 重要は「重要・やや重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いものは以下の2項目であった。子どもの主体性に関するものであった。

- ・したいと思ったことを尊重してそれをさせる (図6)
- ・自分のことは自分で決めさせる



g: 重要は重要→重要でないものへと減少する比例のグラフであるが、実行は実行・ときどき実行・あまり実行せずの割合がほぼ一定のものは以下の2項目であった。テレビの視聴に関するものであった。

- ・テレビを視聴の際は、番組内容を選んでみせる (図7)
- ・テレビは視聴時間を決めてみせる



3) 重要と実行が逆転しているものは以下の3項目であった。近年の子育てにおいてよくみられるようになったものばかりであった。

- ・髪型や服装をおしゃれにする
- ・おけいこや学習塾に通わせる (図8)
- ・就学前に家庭で簡単な文字や数字を教える

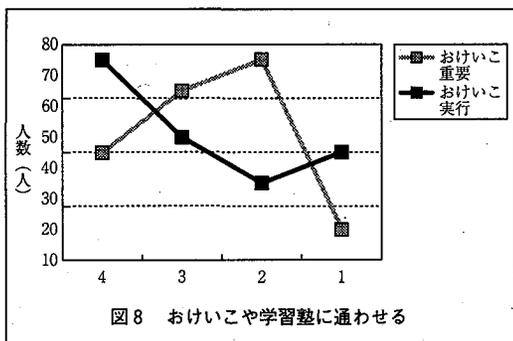


図8 おけいこや学習塾に通わせる

3. 保護者の子育てに関する考え方と、保護者が養育者から受けた子育てとの関連について

ここでは、関連性のある2項目(一部3項目)の度数分布を比較することで結果を表す。また、比較の方法としては、比較対象を並べて折れ線グラフとし、グラフの傾きと2線(一部3線)の重なりにより考察するものとする。

1) 家庭の教育力の低下について

家庭の教育力の低下について「一般的」「自身の周辺」の二つの視点から回答を得た。

「教育力の低下はない」とする回答はごくわずかであったが、一般と周辺では意識に違いが見られた。一般では「そう思う・やや思う」の肯定意見が約76%を占めたが、周辺では、「あまり思わない」の回答が最も多く、肯定意見は約53%にとどまった。

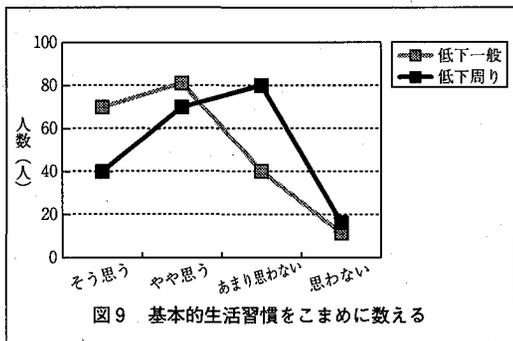


図9 基本的な生活習慣をこまめに数える

2) 養育者と自身の子育ての関係について

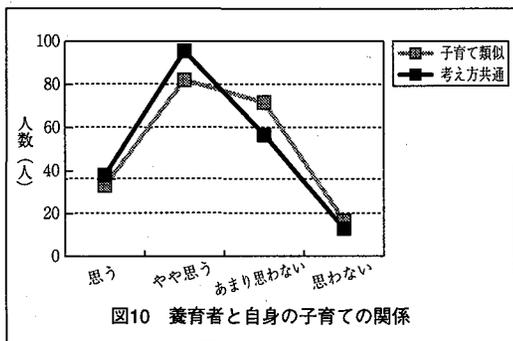


図10 養育者と自身の子育ての関係

保護者の子育てと、保護者が養育者から受けた子育ての関係性について「子育ての内容の類似」「考え方の共通」という項目から回答を得た。

2線のグラフはほぼ同じ傾きをみせ、「やや思う」が最も高く、その次に「あまり思わない」という結果となった。両者に関しては多少度数にひらきがあるものの、養育者の子育てとの関連には二通りのタイプがあるといえる。

3) 養育者の子育てからの取り入れ

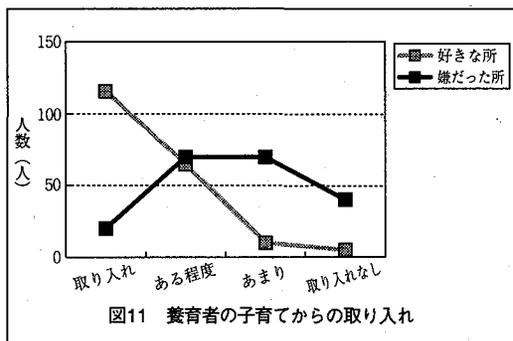


図11 養育者の子育てからの取り入れ

養育者から受けた子育てに関して、「好きな所」「嫌いな所」2つの側面から取り入れている割合について回答を得た。

「好きな所」に関しては、「取り入れている・ある程度取り入れている」の肯定意見が約92%を占めた。「嫌いな所」については、「ある程度取り入れている」「あまり取り入っていない」が同数でそれぞれ全体の約35%を占めた。

4) 子どもの育ちへの願いについて

自身の子育てにおいて、このような子どもに育ててほしいという「願いの有無」とその「願いを意識」して子育てをしているかという2つの項目に関して回答を得た。

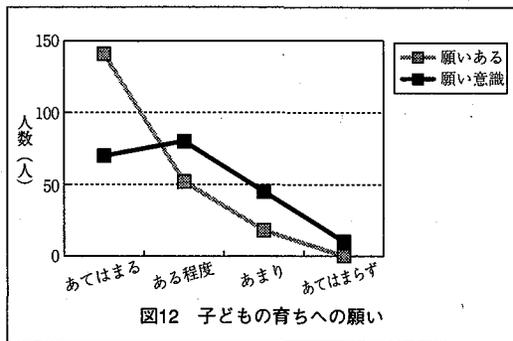
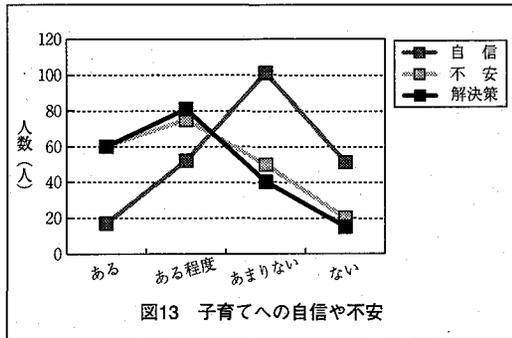


図12 子どもの育ちへの願い

「願いの有無」に関しては、94%が「あてはまる・ある程度あてはまる」の肯定意見であった。「願いを意識」に関しては、約74%が肯定意見であったが、

「願いの有無」に対して「ある程度」の割合が高かった。

5) 子育てへの自信や不安について



自身の子育てに関して「自信はあるか」「不安はあるか」「不安があったときの解決策はあるか」という3項目に対し、回答を求めた。

「自信はあるか」という質問に対しては、「あまりない」が最も高く全体の約51%を占めた。「不安」「解決策」の2項目のグラフはほぼ同じ傾きをみせ、「ある程度」「ある」の順に占める割合が高く、肯定意見が7割前後と多数となった。

第5章 考察

第1節 保護者と園児との関わりや、園児の生活の様子について

① 平均値の視点から分類した4項目について、1項目ずつ考察をすすめる。

a: 差が大きいもの (差0.5以上) について

重要と考える程度と実際に実行している程度に大きな差があったものは、「じっくり向き合って遊ぶ」や「行動をゆっくり見守る」「話をゆっくり聞く」「自分のことは自分でさせる」など保護者、特に【母親が子どもと向き合う時間を多く必要とするもの】が4項目あった。また、「テレビの視聴時間を決める」や「よく歩かせたり、運動させる」「手伝いをよくさせる」など【子どもの行動を規制するもの】も3項目あった。その他の項目としては「子どもの見本となる言動をとる」「栄養バランスのとれた食事」「個性を大事にした子育てをする」があった。このことから、日々の生活の中で、子どもと1対1で向き合うことの大切さを意識しながらも、時間的に余裕のない母親の姿を想像することができる。そして、【子どもの行動面に関しての規制の弱さ】であるが、「見本となる言動をとる」の重要と考える程度と実行している程度の差が大きいことから、母親自身が子どもと同じ生活を過ごしており、子どもの行動を規制する説得力や積極性が乏しい

のではないかと考えることができるだろう。

b: 差が小さいもの (差0.2以上0.5未満) について

重要と考える程度と実行している程度の差が小さかったものは、「テレビ視聴は番組内容を選ぶ」「食べ物の好き嫌いをなくすよう注意する」「姿勢を正させる」「子どもの生活時間を決める」「物を大切にしよう言う」「基本的生活習慣をまめに教える」「時には我慢をさせる」など【生活する態度に関するもの】が7項目であった。また、「家庭の外でたくさんの経験をさせる」「スキンシップを大事にする」「子どもに自分の話をする」など【親子の触れ合いに関するもの】が3項目であった。そして、「大人と交流する機会を多くつくる」「親しい人に挨拶させる」「家庭内でのあいさつをさせる」など【対人的なもの】が3項目、「自分で決めさせる」「子どものしたいことを尊重する」など【子どもの自立に関するもの】が2項目、その他には「叱るときには理由を伝える」「家庭と幼稚園の違いを意識して子育てする」が1項目ずつであった。

これにより、差が小さいものの多くが【子どもの生活の態度に関するもの】であるが、これらがaの子どもの行動を規制するもの (差が大きいもの) でなかったのは、母親の養育者から受けた、自然と身につけていることだからではないだろうか。上記の7項目はほとんど子どもの頃からの育ちの中で築かれるものであり、大人になったからといって新しい習慣が形成されるものではないからである。一方で、【親子の触れ合いに関するもの】の差が小さいのは、親子で過ごす時間を大切に近年の傾向が顕著に表れているといえそうである。また、【対人的】な関係についても挨拶を重要項目の1位に考えている近年の親の傾向 (2002国立教育政策研究所) を映し出しているだろう。

c: 差ほとんどないもの (差0.2以上0.5未満) について

重要と考える程度と実行している程度にほとんど差がないものは、「乱れた言葉遣いを注意する」「大人のいいつけは守るように言う」「悪いことをしたときにはきちんと叱る」など、【子どもの反社会的行動への規制】が3項目であった。その他には「指示したことをしなくても特に気にとめない」「感謝や謝罪の気持ちを言わせる」「子どもと友達のように接する」「就学前に簡単な文字・数字を家庭で教える」があった。

「感謝～」については、bの【対人的なもの】と同質のものであるが、差がほとんどないということから挨拶よりも『ありがとう』『ごめんなさい』を言うことをより重要だと考えていることがわかる。また、上

記で3項目あった【反社会的行動への規制】に関するものも、対人的な要素を持つものの中でもより重要と考えられていると言えるだろう。つまり、社会の中での人とのやりとりに関することに関しては実行度が非常に高いということだろう。「友達のように〜」「文字・数字〜」に関しては（後ほど詳しく述べるが）差がほとんどないものの分布にばらつきがあることから、考え方と実行度ともに2極化していると考えられる。

d：実行している程度が重要と考える程度が上回るもの（差0.2未満）について

本調査において、重要が実行よりも高いものが一般的であったが「わがままをきく」「おけいこや学習塾に通わず」「子どもをおしゃれにする」の3項目については逆転する結果となった。

「わがままをきく」に関しては、aの【子どもの行動面の規制】に関しての項目と合わせ、近年、家庭の教育力の低下の第一要因とされてきた『親の過保護・甘やかし』を裏付ける結果となった。「おけいこ〜」に関しては、今や6割の幼稚園児が何らかのおけいこをしているというデータがあるが、それが本当に必要性を感じてのものばかりでないことが明らかとなった。

・平均値の視点からのまとめ

平均値の視点からの考察は、重要と考える程度と実行している程度の平均値の差をとらえ、1つの項目に対し、親の意識と実際に行っている実行度を測るものであった。差が大きいものには【母親が子どもと向き合う時間を多く必要とするもの】【子どもの行動を規制するもの】が多くあげられた。また、差が小さいものには【生活する態度に関するもの】【親子の触れ合いに関するもの】【対人的なもの】が多く、差がほとんどないものには【子どもの反社会的行動への規制】が多かった。そして、実行している程度が重要と考える程度を上回るものに「わがままをきく」「おけいこに通わず」「子どもをおしゃれにする」の3項目があった。

このことから、家庭を内面的、家庭の外の社会を外面的とすると、内面的な親子間でやりとりが済まされるものに関しては意識と実行度の差が大きく、外面的な家族以外の人とも関わりを必要とするものに関しては意識と実行度の差が小さい、もしくは差がほとんどないという結果となった。

また、近年子どもに対して親が甘いと言われているが、その内容に関しては母親が模範的な行動を示していないとされるものであり、母親自身が養育者から受けた子育ての中で身につけているものに関してはそういった傾向がみられにくいと考えられる。ただ、「子

どもと友達のように接する」という項目において意識と実行度に差がほとんどなかったことから子どもと友達感覚で接している親子が実在すること、全体の傾向として「スキンシップ」「一緒に過ごす時間を大切に」割合が高いことから、母親の威厳的な側面が薄れていると言え、このことが多少影響しているという可能性は否定できないだろう。

② グラフの類度の視点から、1項目ずつ考察をすすめる。

1) -a グラフの傾きがほぼ一致し、重要・実行ともに程度の高いもの

この項目に関しては、母親の意識も高く、実際の実行もともなっていると言うことができる。「悪いことをした時には叱る」「大人のいいつけを守るように言う」「乱れた言葉遣いを注意する」の【子どもの反社会的行動への規制】が3項目であった。また、「感謝や謝罪の気持ちを言う」「家庭内での挨拶をさせる」「親しい人へ挨拶をさせる」の【対人的なやりとり】に関してのものが3項目あった。その他の項目としては、「清潔を保つようにさせる」の1項目があった。

上記のとおり、意識も実行度も高いものは、【子どもの反社会的行動への規制】と【対人的なやりとり】に関してのものが多くを占めた。このことから、母親は子育てにおいて『社会への適応能力』を育むことに、より重点を置いていると言えるだろう。また、一方で、母親の行動ではなく言語での規制が容易なことから、実現しやすいこともまた1つの要因であると考えられるのではないだろうか。

1) -b グラフの傾きがほぼ一致し、重要は「やや重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いもの

「子どもに自分の話をする」「わがままをきいてやる」の2項目があった。この項目については、最低限必要なことと言うよりも、子育ての中のゆとりの1つと考えることができるのではないだろうか。上記の2つの項目は、威厳的な母親のイメージよりもより子どもと対等な関わりをもつ母親を連想させる。度数の分布には、多少のばらつきがあったものの、「やや重要」「ときどき実行」の割合が高かったことから、近年の母親の全体的な傾向として『子育ての中のゆとり』を持っていると言えるだろう。

1) -c グラフの傾きがほぼ一致し、重要は「やや重要・あまり重要でない」実行は「ときどき実行・あまり実行せず」の割合が高いもの

「友達のように接する」「指示したことをしなくても、特に気にとめない」「大人と交流する機会をつく

る」「家庭と幼稚園の違いを意識して子育てする」の4項目があった。

この項目に関しては、重要と実行の2つのグラフの重なりが多いことと、度数の分布が二分化されていることから、母親の意識にも二通りの考え方があると言えるだろう。特に「友達～」に関しては、近年になり多くとりあげられている項目であるが、全体の傾向としてそれを断定することはできないと言ったことがわかった。

2) -aグラフの傾きがあまり一致せず、重要は「重要」実行は「実行・ときどき実行」の割合が高いもの

「時にはがまんをさせる」「物を大切にしよう伝える」「食べ物の好き嫌いをなくすよう注意する」の【親の言葉による注意】が3項目あった。「スキンシップを大事にする」「親子で過ごす時間を大切にする」の【親子の触れ合い】に関するものが2項目あった。「基本的な生活習慣をこまめに教える」「子どもの生活時間を決める」の【子どもの生活について】のものが2項目、その他に「叱るときには理由を伝える」があった。

この項目に関しては、親の重要であるという意識は非常に高く、ある程度の実行ともなっているといえる。【親の言葉による注意】については、

1) -aに挙げた【子どもの行動を規制するもの】よりも、より子どもが自分の意見を主張できるものであると考えられる。つまり、近年の親は子どもを完全には抑制しない、と言っているのではないだろうか。親子の触れ合いについては、ある程度の実行度があることから、親の時間のゆとりの中で子どもと過ごす時間を大切に、また、その時間の過ごし方としてスキンシップを大事にしているのだろう。

2) -bグラフはあまり一致せず、重要は「重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いもの

「家庭の外へ連れ出し、たくさんの経験をさせる」「自分のことは自分でさせる」「話をゆっくり聞く」「行動をゆっくり見守る」「じっくり向き合って遊ぶ」の【大人の時間的な余裕を必要とするもの】が5項目あった。「本やテレビを見るときは姿勢を正させる」「よく歩かせたり、外で遊ばせる」「手伝いをよくさせる」の【子どもの行動を指示するもの】が3項目あった。「栄養バランスのとれた食事をとらせる」「子どもの見本となるような言動をとる」など親の【親としての役割に関するもの】が2項目あった。その他は「個性を大事にした子育てをする」が1項目あった。

この項目に関しては、重要と考える意識は高いが、

実際の実行度はともなっていない、言い換えると重要と実行の間に少しズレが生じていると言える。【大人の時間的な余裕を必要とするもの】は1) -aの同項目と同様、日々の生活の中で母親は忙しく、望んでいるよりも子どもと向き合う時間をとることができていないと考えられる。

【子どもの行動を指示するもの】については、3項目とも家の中の同じ空間で過ごしていれば即実行できるものであることから、尋ねられれば重要であると感じるけれども普段はあまり意識していないのではないかと推測できる。【親としての役割に関するもの】もある程度の実行はあるが高い実行度ではないことは、『親』として威厳を持ち模範的な振る舞いをしているのではなく、肩肘をはらない自然な姿で親として子ども関わっているということなのだろう。

2) -cグラフはあまり一致せず、重要は「重要・やや重要」実行は「ときどき実行」の割合が高いもの
「したいと思ったことを尊重して、それをさせる」「自分のことは自分でさせる」の【子どもの主体性を重きをおいているもの】2項目であった。

この項目に関しては、重要と考える程度は二分しているが、実行は「ときどき」の割合がたいへん高いことから、全体の傾向として、子どもの主体性についてはある程度認められていると言えるだろう。

2) -dグラフはあまり一致せず、重要は「重要→重要でない」へと減少しているが、実行は「実行・ときどき実行・あまり実行せず」の割合がほぼ一定のもの

「テレビを視聴の際は番組内容を選ぶ」「テレビの視聴時間を決める」の2項目であった。

いずれもテレビに関するものであることから、グラフの傾きが似たようなものになったのであろう。親の重要と考える程度はやや高いが、実行があまりともなっていないと言える。これは、テレビというものが、われわれの生活に根付いたものであり、親自身のテレビの視聴の仕方が上記の項目をあまり意識していないという結果を示しているのではないだろうか。

3) 重要と実行が逆転しているもの

「髪型や服装をおしゃれにする」「おけいこや学習塾に通わせる」「就学前に家庭で簡単な文字や数字を教える」の3項目であった。

「服装～」に関しては、重要が「あまり重要でない」実行が「ときどき実行」の割合が高いことから、必要ということではないが外見が良いほうがよいという親の気持ちの表れであろう。ゆとりや豊かさの中で、社

会が煽る「おしゃれ旋風」を受けたおしゃれ意識の高まりによる流行の産物と考えることもできるのではないだろうか。また、「文字～」に関しては、重要と実行のグラフの傾きがほぼ一致し、また減少している比例のグラフであることから、実行している親は若干多いものの就学前教育に関しては考え方がわかれており、その考えの実行度も非常に高いといえる。「おけいこ～」に関しては重要が「あまり重要でない」の割合が高いにも関わらず実行は「実行」の割合が最も高い結果となった。幼児期に習い事をする割合が近年増加しているが、早期教育に期待をよせているというよりもむしろ、皆がしているから・友達ができるからといった理由で始めているということなのだろうか。

・グラフの頻度の視点からのまとめ

1の重要と考える程度と実行している程度のグラフの傾きがほぼ重なるものは親の意識している程度に親の行動が伴っているものといえる。重要と考える割合が高いものに【子どもの反社会的行動への規制】【対人的なやりとり】があった。このことから、近年の親は子育てにおいて、子どもに社会への適応力や対人関係を上手く築ける能力を育むことを大切にしていることがわかる。また、ある程度の実行度が認められたのは【子育ての中のゆとり】を含む項目である。親と子の境界線を引いているのではなく、柔軟性のある親子関係が垣間見られることだろう。そして、重要と考える程度と実行している程度の意見が二分したものの中に「友達のように接する」という項目があった。これは、子どもと対等関係に立つべきという考えと、親と子のそれぞれの立場をきちんと確立すべきという考えの反映であると思われるものがほぼ半数ずつという結果となった。このことから、親としての子への関わりは、従来の境界線をひいた固い関係でなく、やわらかな関係へと移行してきていると言いうことができる。親としての役割を柔軟な親子関係の中で果たしているというのが近年の傾向といえることができるのではないだろうか。

2の重要と考える程度と実行している程度のグラフの傾きがあまり一致しないものは、親の意識している程度ほど実行がともなっていないものといえることができる。親の意識が高く若干実行が劣るものとして【親の言葉による注意】【親子の触れ合いに関するもの】【生活に関するもの】があった。だが、これらの項目に対しては、通常、理想と実際には多少のズレがあるものとされることから実行度は割合高いとも考えられる。口頭による注意や子どもの生活に関しては、日常生活に根ざしたものであるため実行度が高いのであろう。親子の触れ合いについては、子どもへの愛情を直接的

に表現する傾向があると考えられる。

親の意識が高くある程度の実行に抑えられているものに【大人の時間的余裕を必要とするもの】【子どもの行動を指示するもの】【親の親としての役割に関するもの】があった。近年の親は思っている以上に子どもと向き合う時間を確保できていないことがわかる。そして、上記にもあるように親子の触れ合いを大切にしていることから親子関係は完全な縦の関係ではなくなっているといえるだろう。もしこれが、子どもの行動への指示の弱さにつながっているのだとすれば重要視しなければならない問題である。子ども時代に獲得しておかなければならない体力や姿勢を得るタイミングを逃す可能性を含まれているからだ。また、それは親が模範的態度を示していないものであるということができないだろうか。利便性を追求した生活は得るものも大きい失うものも大きいということを念頭において生活している人がどれだけいるというのだろうか。その面においては、親の意識改革が必要であると考えられる。ただ、模範的態度に関して「ある程度」の実行度であることは、家庭の教育力の低下と直接的に結びつくことであるかもしれないが、一方で「ある程度」ということが親自身も自然な生活をおくる中で親としての役割を果たしていると考えられることもできるだろう。

「重要・やや重要」と考える程度が同数であり、実行は「やや実行」が高かったものが【子どもの主体性】に関するものであった。小学生の親を対象にした調査で子どもに育みたいものの1位が「自分の意見をはっきりいう」であったにも関わらず、今回の調査では重要・実行共に数値がある程度であったのは、調査対象が幼稚園児だったからであろうか。幼稚園児の年齢では、主体性はある程度認められているが親の判断によることも大きいといえる。

実行が「あまりしていない」が最も多かったのが【テレビ視聴】に関してである。テレビが親にとっても幼児にとっても大変身近な存在であり、視聴態度を日々の生活の中であまり意識していないことがうかがえる。

3の重要と実行が逆転しているものは【近年の子育ての傾向】としてとらえられているものであった。おけいこもおしゃれも「あまり重要でない」という意見が最も高かったことから、重要であると感じている実行ではなかったことがわかる。それは、周囲の環境や社会の変化に影響を受けてのことであろう。文字や数字に関しては重要・実行ともに肯定的な意見が多く就学前の文字習得は一般的になりつつあるようだ。

第2節 保護者の子育てに関する考え方と、保護者が 養育者から受けた子育てとの関連について

1. 家庭の教育力の低下について

家庭の教育力の低下について「一般的にみて」の肯定意見が約76%だったのに対し「自身周辺」では肯定意見は約53%にとどまった。どちらも、肯定的が半数以上を占めたことには変わりはなく今日の課題を再確認した結果となったが、その両者の差には大いに注目すべきであろう。一般が高い割合となったのは、社会の風潮が家庭の教育力の低下を危惧したものであり、その影響も受けていると考えられる。実際に子育てをしている母親自身は「あまりそう思わない」とお互いのことを感じているとすれば、現養育者は家庭の教育力の低下について強く意識せず子育てを行っていると考えられる。ただ、社会に対しての低下(一般)には、幼稚園児以外も対象に含まれることから安易に自身周辺では教育力の低下は少ないと考える危険性は捨てきれない。

2. 養育者と自分の子育ての関係について

回答者が受けた養育と現在おこなっている子育てとの関連について、考え方が共通している場合には親の養育が行動として表れ、共通していない場合には親の養育とは類似していないことがわかった。また、類似している程度は「やや思う」と回答した割合が最も多く、次いで「あまり思わない」の割合が高かった。考え方が共通していると「思う」と答えた割合はわずか15%であり、親から受けた養育をそのまま実践している家庭は少ないといえる。このことから、養育者から受けた子育てと現在母親が行っている子育ての関連性はあまり強いものではなく、影響を受けながらも自分流の子育てを実践していると言ってよいだろう。

3. 養育者の子育てからの取り入れについて

養育者の子育ての中で「好きな所・良かったと思う所」を取り入れている割合は非常に高く、「嫌いな所」を自然と行っている割合は「ある程度」「あまり取り入れていない」が同数であり意見を二分した。母親は自身の受けた養育に対して良いと感じられたものに関しては「現在の子育ての中で実践している」ということになり、養育を受けた子どもからみて良いと感じられたことに関しては親から子へ受け継がれていっているといつてよいだろう。また、実行度が高いことから、子どもの視点からも好感の持てる子育てやそこから育まれるものについては教育力の低下はみられにくいと考えられる。嫌いな所に関してであるが、嫌いにも「子どもを否定するもの」と「自由を子どものために制限するもの」の二つがある。だが、どちらの項目も3～

4割のある程度の実行度を保持していることから、幼いころから身についた養育はなかなか抜け出せないことがわかる。

4. 子どもの育ちへの願いについて

子育ての中で、「このような子どもに育てほしい」という願いを持ちながらも実際にはそのことを意識して育児をする親の割合はやや低いという結果となった。このことは、子どもの育ちへの理想は抱いているにも関わらず、実際の生活の中では「ある程度」意識しながらも特別な日々を送っているわけではないということが言えるだろう。

5. 子育てへの自信や不安について

子育てへの自信があるかという問いに対して「あまりない」という回答が半数以上を超え、親は育児不安と背中合わせで子育てをしていると言える。しかし、「不安はあるか」と「不安があった時の解決策」のグラフが同じ傾きをみせ、肯定意見が7割前後であった。このことから、不安と同じ割合だけ解決策があり、悩んだり迷ったりしながらも自分なりの子育てを少しずつ探し出している親の姿が伺える。

第6章 まとめ

第1節 家庭の教育力の低下の現状について

「家庭の教育力は低下した」という社会の声に対し、「もともと家庭に教育力はなかった」(2003野々山)という声も聞かれる。しかし、近年の子どもの変化を危惧する多数の意見を、家庭と切り離すということは考え難いことである。家庭における子育てを「教育」と捉えた場合に、親の意識の変化が「教育」の変化を生み出し、その「教育」の変化が子どもの変化を生み出している、というのが今回の研究の前提となる考えであった。

調査の結果は、【子どもの反社会的行動への規制】【対人的なやりとり】【親子の触れ合いに関するもの】については教育する力が強く、【大人の時間的余裕を必要とするもの】【子どもの行動を規制するもの】に関しては教育する力が低い、というものであった。つまり、近年の親は、他人とのやりとりが加わる社会的な面については大変重要であると考え、育児の中でも意識して子育てを行っている。だが一方で、家庭内における子どもの生活面への関わりについては、重要と感じているほどには実行できていない、ということがわかった。これらについて仮説の検証を行った場合、仮説1の「近年の親は、社会的な項目に関して重要と考え、実行も伴っている」に関しては証明された、と言えるだろう。しかし、仮説2の「近年の親は、家庭の

中で行われる親子間のやりとりが中心になる項目に関しては重要と考える程度も実行している程度も低い」に関しては、「実行している程度は低い」ということは証明されたが「重要と考えている程度は高い」という重要と考える程度は逆の結果となった。つまり、家庭の中で行われるものの中でも、子どもの行動の規制など親が模範的な行動をとることが必要である項目では、「教育する力の低下」がみられる、と言える。「見本となる言動をとる」という項目に対しても「ある程度」の実行度である親が大変多いことから、威厳的な親から等身大の親へ移行してきていると捉えることもできるであろう。しかし同時に、親の模範意識の低下により、子どもの人的環境からの自然習得の減退につながっているということも忘れてはならない。また、重要と考えている程度以上に実行している程度が上回ったものに「お稽古や学習塾に通わせる」という項目があった。これは、仮説3の「近年の親は子どもの教育に関して早期から学ばせることが必要だと考え、またそれを実行している」と検証すると、実行している割合は高いものあまり重要であるとは考えていない、という結果となった。これらの結果は、社会の流れにながされている親が多数いることを裏付けると共に、確かに学歴中心の社会から「ゆとり」を求め始めた親の姿の反映であるといえる。

第2節 養育者の子育てと近年の親の子育てとの関連について

本調査において、近年の親は自分の養育者から受けた育児をそのまま実践しているのではなく、影響を受けながらも自分流の子育てをしている、ということがわかった。そして、その内容については「好きな所・良かったと思う所」を取り入れている割合は非常に高く、「嫌いな所」を自然と行っている割合は意見を二分した。これらを教育する力の低下の是非を問う判断材料とする時、少なくとも親の意識は「低下していない」という認識を持っていると考えられるであろう。やはり、家庭の教育力の低下の原点は「力不足」ではなく「意識の変化」にあると言える。

第3節 幼稚園側の見解と親の意識との関連について

予備調査において、幼稚園の教諭へ「近年の保護者・子どもの傾向」を尋ねたが、共にマイナスを示す回答が多数を占めた。本調査との比較の結果、保育者と保護者に大きな差があったものは「きちんと怒れない親の増加」であった。保護者は、「悪いことをしたときには叱る」という項目に対して重要・実行共に非常に高い割合が肯定している。このことは何を指し示しているのだろうか。これらは、保育者が家庭に求めて

いるものと、家庭が必要と感じているものの基準のラインにズレが生じているといえるのではないだろうか。このズレは、近年の親の養育者世代とも生じていると考えることができ、これが、社会が「家庭の教育力低下」を感じている要因の一つと捉えることができるであろうと思う。

第4節 家庭の教育力の低下とは

当論文では、「親の意識の変化」に焦点を当てて家庭の教育力の低下の是非を論じてきた。社会のもつ昔の家庭のイメージは厳格なものであるが、その厳格さが崩れ、等身大の肩肘をはらない自然な子育てを行っているのが近年の親であると思う。等身大の親として接することは、子どもにとって親をより身近に感じることができ、より多くの愛情を直接的に受け取ることができるという意味で大変意義深いことであると思う。しかし、その崩す程度によっては、子どもの心身の健やかな成長に影響を及ぼす可能性も否定できない。今回の調査を進める中で、「重要と尋ねられれば重要であると感じるが、実際にはあまり意識して生活していない」という項目もいくつか見うけられた。子どもは親を見て育つものである。ゆとりの中で対等な親子関係を築くにあたって、やはり「見本」としての模範的な親の行動は子どもの発達にとって最低限必要なことであろう。家庭の教育力の低下は厳格な子育てを崩す「程度」の問題でもあり、「子どもの見本」であることの自覚の啓発を広めていくべきであろう、と筆者は考える。

第7章 おわりに

「子どもの変化」が問題視されている近年は、その子どもへの教育の責任を家庭に返すことが一般的となっている。その中において、高度経済成長期をきっかけとした教育する家族の「母子密着型の子育ての歪み」を要因とする研究はいくつか見られたが、「親の意識の変化」に注目した研究はほとんど見られなかった。「最近の親は…」といったような近年の親に対して批判的な見方を示す人達がいる一方で、育児雑誌の人気ぶりに反映しているように子育てに関して熱心な親が増加しているという現状がある。本研究では、「いつの時代も親は子育てに懸命である」という論理を根本において、「家庭の教育力が低下した」といわれる背景にあるものを問うことをテーマとした。そして、近年の親は「教育力」がないのではなく、重要であると強くは感じていない、つまり「意識が変化したのではないだろうか」という仮説を立てて研究を進めてきた。

この結果、家庭の「中」に関連するものについては実行度が低く、「外」に関係している項目については実行度が高いということがわかった。しかし、現場の幼稚園の声は「外」の項目に関連する「きちんと叱れない親」や「過保護」な親の増加を指摘している。このことは、親の子育てに関して求める度合いや満足度に園と親のズレが生じているのではないかと考えられるであろう。さらに両者の求める程度の違いについて明らかにされるべきであると思う。また、近年の親は、親から受けた養育の中で「好き」「良いと思う」と感じるものは実行していると回答していた。このことに関しても、近年の親の教育する「力」が低下したのではないという見解ができるが、昔と今の子育てに求める程度に違いがあるとも考えることができる。本研究は、家庭の教育力の低下の詳細を明らかにし、また、知識教育についてもそんなには重要とは感じていないという近年の親の傾向を明らかにしたという点では意義のあったものであると思う。今後は、これらの結果をふまえ、上記に述べた二つのズレに関して更なる調査を広げていけたらと思う。そして、家庭の教育の低下が問題とされている今の社会の中で、子ども達に最も望ましい家庭教育の在り方を模索していきたい。

引用文献・参考文献

- ・ 広田照幸 (1999) 「日本人のしつけは衰退したか」 講談社現代新書 pp.7-48 pp.75-200
- ・ 清川輝基 (2003) 「人間になれない子どもたち」 榎出版社 pp.24-93
- ・ 野々山久也 (2003) 「家族の『遊び力』」 ミネルヴァ書房 pp.83-159
- ・ 汐見稔幸 (1996) 「幼児教育産業と子育て」 岩波書店 pp.9-26
- ・ ベネッセ教育研究所 (2000) 「幼児の生活アンケート報告書」
- ・ 国立教育研究所内家庭教育研究会 (2002) 「家庭の教育力再生に関する調査研究」
- ・ 奈良県教育委員会 (2001) 「家庭教育アンケート調査報告書」
- ・ 山陽新聞 (2002. 7. 10) 「遅くなる子どもの就寝時間」
- ・ 西日本新聞 (1999. 5. 14~7. 9) 「子どもが変わった？」
- ・ 北海道新聞 (2000. 2. 21) 「小1問題に戸惑う現場」
- ・ 山陽新聞 (2000. 2. 28~2000. 3. 10) 「ほくたち変？」
- ・ 東京新聞 (2001. 2. 2) 「しつけ 親が? 保育園が?」
- ・ 小玉亮子 (2003) 「子どもが求めている母親像」 児童心理 2003.10 pp.38-42